

のギリシア・カトリック神学院在籍 Verdes Miklós 氏に厚く御礼申し上げる。

---

Annemaré Kotzé,

*Augustine's Confessions: Communicative Purpose and Audience,*  
Supplements to *Vigiliae Christianae*,

vol. LXXI, Brill, 2004, pp. xi+279

松 崎 一 平

周知のように、アウグスティヌスの『告白』全13巻は、第1巻から第9巻までは自伝的部分で、記憶について論じる第10巻を挟み、第11巻以降の3巻は創世記第1章-第2章冒頭の詳細な、いわゆる比喩的解釈からなっている。近・現代において『告白』は一般に自伝として受け取られ、第10巻以降との整合性について疑義が出されてきた。また、自伝的部分の記述について、その歴史性が問題にされることも多い。あるいは、主に神学や歴史の研究者が『告白』に関心をもってきたこともあって、その関心におうじて、ある部分を取り分けて分析したり論じたりすることが多く、『告白』全体を文学作品として一体的に考察することは稀である。しかしながら、卓越した修辭学者であった『告白』の著者が、何の構想もなく『告白』を書いたはずはない。1600年の時を隔てる現代の読者や研究者には理解するのに大きな困難が伴っても、アウグスティヌスは何らかの意図 (communicative purpose) をもって同時代の読者 (著者は audience と呼ぶことを好むので、以下「聴衆」とする) に向けて、全13巻を一体のものとして書いたはずである (『再論』の記述もそれを支持する)。本書の著者 Kotzé は、ある明確な意図のもとに書かれた統一ある文学作品として『告白』を理解すべきであるとし、その意図を明らかにすることを試みる。

著者は Preface に続く Introduction で、問いのかたちで予め仮説を立てる。『告白』はどの程度までアウグスティヌスの時代に人気があった protreptic なジャンルに合致

するか、また、どの程度まで特別な聴衆としてマニ教徒を意図しているか。つまり、著者は、『告白』全13巻は、一貫して protreptic であることを意図する著作であり、その対象（聴衆）はマニ教徒であると考えらる。

まず全体の構成を見ておく。第1部（Prolegomena）は、『告白』の著作意図や構成に言及する先行研究を精選して紹介しつつ自らの立場から批判を加える第1章（The *Confessions* and its Academic Readers: A Survey of Secondary Literature）と、『告白』のジャンル論に関わる先行研究を批判的に踏まえつつ自らの仮説を提示する第2章（The *Confessions* and its First Readers: Genre and Audience）とからなる。第2部（Analyses）では、『告白』全巻に手際よく分析を加える。第3章（Communicative Purpose and Audience in the Meditation on Psalm 4 (In medias res)）では、アウグスティヌスが回心直後、詩編第4編の読誦から得られた大きな喜びを回想する『告白』第9巻第4章に分析を加え、それが聴衆としてマニ教徒を念頭に置くことを指摘する。第4章（Protreptic Purpose (Sic invenietur)）では、全巻に protreptic な性格が見出されることを、第5章（Audience (Cui narro haec)）では、全巻が聴衆としてマニ教徒を念頭に置くことを指摘する。最後に Conclusion で、全体の議論をコンパクトにまとめる。以下、評者が最も興味深く読んだ第2章を中心に本書の要点を紹介する。

第1章で著者が取り上げるかなりの数の先行研究の内、重視されているのは、『告白』に protreptic な性格を見出すものと聴衆としてマニ教徒を想定するものとのである。前者としては、Erich Feldmann の特に、*Augustinus-Lexikon*, vol. 1 (1994) の *Confessiones* の項目の記事（そのゆえの制約はあるとする）と、Catherine Joubert の論文、'Le livre XIII et la structure des *Confessions* de Saint Augustin', *Revue des sciences religieuses* 66 (1992) が、後者としては Johannes van Oort のアウグスティヌスの、特に『告白』とマニ教の関係を論じた諸研究があげられる。

第2章第1節（The Genre of the *Confessions*）で著者は、Mark D. Jordan, 'Ancient Philosophic Protreptic and the Problem of Persuasive Genres', *Rhetorica* 4 (1986) などの先行研究に依拠しながら、protreptic な著作が、聴衆を回心へと導くためのものであるとともに、すでに回心した聴衆をよりよき生に向かって励ますためのもの（*paraenesis*）でもありうることを、*protrepsis* と *paraenesis* との2つのジャン

ルの定義の検討を通して明らかにする。さて、protreptic な著作は、聴衆の説得を意図し、その内容や語調、戦略は、いかなる聴衆を念頭に置くかに、また聴衆と著者との関係におうじて多様でありうる。また、聴衆の説得に役立つかぎり、apology や diatribe といった様式も利用されうる。よって、『告白』は *sui generis* な作品であるといわれうるが、だからといってジャンルを超越するわけではなく、いわば protreptic-paraenetic な著作であり、先行作品を見出すことができる。こうして著者は、相手の主張を論破する部分（否定）と著者の立場が述べられ弁護され説明される部分（肯定）とからなること、また聴衆に決断を直接訴える部分が含まれることなどの、protreptic な著作（文章）に基本的な特徴をあげる。また、染色（『告白』ではこれは希）や医師と患者のイメージが用いられることが多い。さらに、*scientia* がテーマとなることも多いし、*exempla*（手本となるべきひとの生き方）もよく使われる。当然のことながら、*exhortare*、*converti* などのことばやその派生語、また *dormire-evigilare*、*excitare* なども、さらに *accendere*、*flamma*、*incendium* などの火のイメージを喚起することばもよく使われる（いずれも『告白』に妥当する）。先行作品に関しては、Courcelle の研究に基づきながら、一步進めて（これは本書全体にもあてはまる）、著者は、自伝（伝記）的記述と哲学的議論と註釈から成るという構成上の類似に着目する。するとたとえば、*Vita Plotini*<sup>11</sup>を前に置く *Enneads* なども先例となるが、著者が特に注目するのは、Justin Martyr の *Dialogus cum Tryphone*、Cyprian の *Ad Donatum*、Hilary of Poitiers の *De Trinitate*、そしてアウグスティヌス自身の *Contra Academicos* である。*Dialogus cum Tryphone* は、自伝的記述の占める割合に大きな相違はあるものの、ユスティヌスがある老人との出会いをきっかけに聖書に向かい回心に到る過程は、『告白』第8巻と極めてよく似ている。さらに、自伝的記述に引き続いてユダヤ教徒とキリスト教徒との対話形式による論争（聖書の註釈や聖書による論証が付随するし、詩編にも特に場所が割かれている）があつて、最後にはユダヤ人トリュポンに対するキリスト教への回心の勧めで終わっている。*Ad Donatum* も、予想外に著者の個人的経験の（自伝的）叙述から始まり、神学的な議論に先立って、手本となるべきひとの選択を示す。自伝的部分には『告白』に類似する記述が見出される。光（真理）を求めて闇をさまよう苦悩、過去の罪の告白、自らの回心の記述をクライマックスとすること、神への依存性の自覚、ドナトゥスにたいする励まし、たましいの改善を医学用語で語ること、世俗的な価値の否定など、『告

白』の自伝的記述が *Ad Donatum* に倣った可能性が Courcell によって指摘されているが、著者は、両者がともに自伝的記述と哲学的議論の組み合わせからなる点を重視する。著者によると、ヒラリウスの *De Trinitate* を合わせた3つの著作は、いずれも自伝的記述と哲学的議論（論争）からなり、かつ protreptic である点で、『告白』の手本たりうること、そしてアウグスティヌスの初期の著作、カシキアクムの対話編の1つである *Contra Academicos* が、まさにそれらと類似しており、『告白』の先駆けと考えられることを指摘する<sup>2)</sup>。*Contra Academicos* は、カトリック教会に帰属したアウグスティヌスがマニ教の信奉者（ロマニアヌス）に宛てたものであり、protreptic な意図をもつ自伝的記述を含む点で、『告白』と軌を一にする。また、第1巻および第2巻の冒頭の、ともにロマニアヌス宛のことばの中には、protreptic な意図が明白に見て取れる。たとえば第1巻（1章3節）では、*excitare*<sup>3)</sup>、*evigila, oro te* などと、第2巻（1章1節）には、*nesesse est disciplina atque scientia sapientiae* とある。後者の箇所には、*quaerere-invenire* という *Matt. 7, 7* に基づくことばが使われる。対話編の主題がアカデメイア派の懐疑論であるのは、それが、アウグスティヌスがマニ教を離れて新プラトン主義に向かう経路となったからであり、ロマニアヌスがカトリック・キリスト教（真の哲学）をよりよく理解するために役立つことを期待したからだ。第1巻第1章（4節）には、自らの『ホルテンシウス』体験にも言及し、真の哲学に向かう（回心する）ように勧めている。*Contra Academicos* では自伝的記述は第2巻のはじめにあって、アウグスティヌスの若き日の生と回心（ここでは *Libri Platoniorum* やパウロ書簡との出会いも語られている）を語っており、明確に、ロマニアヌスを哲学に向かわせる protreptic な意図をもつ。このような考察を重ねて著者は、アウグスティヌスは回心譚をもつ protreptic な効果を含む、protreptic な著作の定石に通じていたと推測する。すなわち著者によると、『告白』は、哲学的な教説への導入として自伝（伝記）的記述を読むことに慣れた、また・あるいは、論争的・註釈的議論に先立って手本となるべきひと（生き方）を示すことで、読者を回心させたり読者の決断を支えたりすることをめざす protreptic な著作を読むことに慣れた（古代の）読者の視点から見られるべき書物である。著者はいう、古代の読者は、『告白』の自伝的記述と聖書解釈の組み合わせに驚くことはなかった。驚いたのは、自伝的記述が単なる付加物ではないこと、加えてその長さであり質であったと。

2章2節（The Audience of the *Confessions*）では『告白』の聴衆について検討さ

れる。むしろ、著者はマニ教徒を想定して書かれたものと考えてるが、すでに回心したカトリック教会の信者たちも対象にするという。『告白』が protreptic-paraenetic な著作であるゆえんである。特に第1巻-第9巻は主にマニ教徒が、第10巻以降は主に信者が念頭にあるが、第13巻の結末部分でアウグスティヌスは再びマニ教徒に精神を向ける。従って『告白』は protreptic な性格が勝っている。著者は、アウグスティヌスがマニ教徒を念頭に置いて『告白』を書いた理由の1つとして、当時ヒッポや北アフリカにマニ教徒が多くいたことをあげている。アウグスティヌスは『告白』を書く時期、かれらと公開討論を行い駁論を書いていた。思うに、おそらくマニ教徒がカトリック教会の信者と区別しにくい仕方でも活動していたであろうことも、『告白』が protreptic-paraenetic な性格をもつ原因であった。最後に著者は、20世紀の後半にめざましく進んだマニ教研究の成果を踏まえて、マニ教の特質について整理している。合理的批判精神、禁欲生活の遵守、小さな集団を構成し仲間を思いやる態度、その宇宙生成神話のゆえに時間に関心を寄せていたことなどをあげている。

第2部の分析は、全体として要を得たものであり、説得的である。マニ教徒を聴衆とすることを確認するための核心は、『告白』第9巻第4章（8節-11節）の分析である。アウグスティヌスはそこで、カシキアクムで詩編第4編を読誦し、いかに深くこころが動かされたかを回想するが、マニ教徒がそれを見ていればよかったのといひ、そうすればかれらも自分と同じこころを共有できるようになったのといひ、『告白』全13巻の枢軸といふべき箇所が、マニ教徒を念頭に語られていること、しかもかれらを突き放すのではなく、かれらが回心するように祈るというふうであることを著者は重視する<sup>4)</sup>。それこそが『告白』全13巻の基調だと考えるからである。（第3章）『告白』の中で繰り返し用いられる *quaerere-invenire* という Matt. 7, 7 のことばの用例を、あるいは第2巻や第4巻で友情が主題とされる箇所を著者は分析し、それらはみなマニ教徒を念頭に置き、かれらのめざましさを秘かに期待するためのものであるとする。（第4章）たとえば第1巻の冒頭の記述を分析し、著者はそこにマニ教徒への密やかなメッセージを読み取る。あるいは第13巻を分析し、すでに回心したひとびとへの呼びかけとマニ教徒を回心に促す呼びかけとの交差を指摘する。（第5章）

著者の主張に従えば、『告白』でアウグスティヌスは、マニ教徒を批判しながら、

マニ教徒を完全には排斥しない。かつてマニ教徒であったアウグスティヌスは、みずからの経験と知識に照らしながら、修辭学者としての学識を縦横に生かして、マニ教徒を粘り強くかつ効果的に説得しようとした。その結果が『告白』全 13 巻というユニークなかたちを取ったのだ。アウグスティヌスはかつての友を、まことに深く気遣っていたということか。

本書は、今後、『告白』の構成や成立に関する研究を行うための必読の書物であると思う。

なお、著者は南アフリカの University of Stellenbosch の古典学の講師とのこと。

### 注

- 1) p.70 に、*Vita Porphyrii* とあるのは誤りであろう。
- 2) アウグスティヌスの初期著作に『告白』の種を考えることに関して、拙論「罰の語り—アウグスティヌス『自由意志論』第 1 巻—」（『富山大学教養部紀要』第 24 巻 1 号（1991）所収）に触れるところがある。なお、James J. O'Donnell, *Augustine: Confessions*, vol. 1 (1922), p. xlviii を併せて参照されたい。
- 3) p.80 に *exitare* とあるのは誤り。
- 4) 拙論「回心と眠—アウグスティヌスとパウロの回心をめぐって—」（『プラトニズムの歴史における人間観の変遷』（平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金〔基盤研究(BX1)〕研究成果報告書）（2006）所収）で、この箇所について考察を加えた。

---

John Peter Kenney

*The Mysticism of Saint Augustine: Rereading the Confessions*

Routledge, 2005, pp. xv + 160

佐藤 真基子

本書は、問題提起と研究史概観、本論の議論構成の説明がなされる序章と、各部三章ずつ全三部から成る本論、および結論から構成されている。以下に、重要と思われる